

平林たい子『殴る』

——闘う女の苦しみ——

はじめに

『殴る』（改造）一九二八・一〇）は、『施療室にて』（文芸戦線）一九二七・九）と並んで、たい子の戦前のプロレタリア文学系の作品において傑作とされている。本テクストには、貧農家の娘であるぎん子の幼少時代から、成長し都会で生活するまでの日々が描かれている。ぎん子の幼少時代は「日露戦争が始まろうとする頃」とあり、一九〇四年に当たる。作品内時間は四歳のぎん子が一八歳になるまでの一四年間、一九〇四年から一九一八年までの間と定めることができる。ぎん子は農父に絶えず殴られる母を見て育ち、農村の苦しい生活に耐えられないことや母のようになるまいという決心から都会に飛び出していく。都会で仕事を得ることができ、世帯を持つようになるが、結局臆首される上に、夫にかつての母のように殴られる。その後、監督に殴られている卑屈な夫を見兼ねたぎん子が思わず監督を悪罵したとたん、逆に夫に殴られるという場面でテクストは閉じられる。

同時代には黒島伝治の「直接経験以外の材料」、「形式上新しい試み」という指摘や、横光利一の「貧しい家庭の娘であるが故にかく

グプタ スウィーティ

のごとく殴られると云う無産派の人生観²⁾の描写という評価がある。その後、岩淵宏子氏が「階級的抑圧をうけるのみならず、被抑圧者である男たちのさらにその下で、虐げられ蠢めいている女のみじめな状況を、殴られるという身体的状況に集約させてリアルに浮び上げせ」、「割れるように泣き出す主人公の姿に、女の無念さと絶望が滲み出ている」と指摘し、中山和子氏が「暴威にさらされる者自身の暴力として、より劣位のものにふるわれる」という「内部迫害の暴力関係は資本主義社会における男と女の関係でありその支配構造なのである」⁴⁾と分析している。

本テクストでは、農村と都会、農業と工業、農婦と職業婦人、母と娘、資本家と労働者、地主と小作人、肉体労働と事務労働という様々なコントラストが見られる。母と娘という二人の女性の人生が描かれているにも拘わらず、かつて母については等閑視され、二人を比較して論じられることはなかった。本稿では、母と娘のコントラストに焦点を当てることによって、階級社会における女性への搾取の実態をどのように形象化しているのかを明らかにし、その中でぎん子の新しさを探り、結末についても読み解きたい。

一 暴力を見て育った少女

本テクストにおいて女性が二人、すなわち、ぎん子とぎん子の母が登場している。二人とも夫に「殴られ」、それぞれ同じような夫婦関係を持つことになるのだが、二人の生き方は大きく違う。母は家事や子育てをするだけでなく夫と共に農作業に従事しているのに対し、ぎん子は家出をし、都会に出て自立を目指すのである。ぎん子の決意の裏には農村の貧しい生活に嫌気がさしていたこともあったが、それ以上に幼少時から見てきた母の惨めな姿が原因だったと捉えたい。まず家庭状況を確認しつつ、ぎん子の幼少時代についてみていきたい。

ぎん子の家族は当初父母と三人の兄弟から成る五人家族であった。「一番末の四歳」のぎん子の上に兄が二人いた。一家の食糧事情をみると、「夏納屋の前の席で乾して保存しておいた乾飯は鶏の糞の香」がし、その中に「鶏の足がはこんだ泥もまじっていた」とあるように、食糧が足りておらず、貧しい生活をしていることが分かる。食糧が足りないにも拘わらず、父は「よく」「酒を呑ん」でおり、彼にとって雪が降れば、酒は「米の飯より必要」な物となっている。「酒は買えば高いもの」なので、「隠しておいた酒甕を縁の上まで引き摺り上げ」、米と糶で酒を造っている。「役人に見つかる」ことは「千度に一度もきいた事がない」とあるように密造している。酒を飲んでいるところを子供達に見られると、彼は「子供の方へ首を回し」、「こちらを見るなという意味」で「黒目をよせて睨んだ」。「睨ん」でいる父を見た子供達は「いじけて、乾飯を頬ばって体によじり」、「三人ともそういうわざを知って居た」。父と子供達の関

係は決して望ましい親子関係ではなく、子供達は父を怖い存在としてみている。

父の母に対する態度についてみていきたい。父は常に酒に溺れており、母に頻繁に暴力を振るっている。

鳶口のような爪のある手が母の耳のところに打ち下された。雪やけの皮膚の上で、皮の厚い父の掌の思いきり乾いた音がした。つづけて音がした。(略)母は狭い背を懶く動かして松造の体を避けた。表情を忘れた顔で赤土の崖のような父の額を見ている様であった。錆びたランプの吊鉤を見ている様でもあった。父は酔った目を母の下脛のところに据えた。(略)団扇の様にひろげていた掌を握った。そしてなぐった。(傍線引用者、以下同じ)

父による暴力は子供達にとつて「いつもの事」であり、「殴られた」母が倒れるとみんな「泣き出した」。すると、父は「口のかけた湯呑」を子供に「投げ」るので、「更に大声で泣いた」。母は暴力に逆襲するでもなく、阻止するでもなく、黙って耐えている。夫婦間の暴力を目撃した子供の直接の反応について、一般的には「圧倒的な反応は自分自身と母親に関する恐怖である。母親の命を案じたり、暴力を引き起こしてしまった自分を責める。隠れたり、暴力を止めようとする。年長の子どもは幼いきょうだいの面倒をみようとする」とされている。しかし、ぎん子より年上の「二人の男の子」は父を「恐れて」はいるが、恐怖のあまり、ぎん子を守ろうとはせず、泣いているだけである。だが、「女の子」のぎん子は「泣かな」い。

彼女は「低い小鼻を遠くはさんだ二つの目で、下から憎悪をこめて父の鼻の穴を見上げ」、「何かのはずみにいきなり父の足へ噛みついた」とあるように、母をむやみに「殴る」父に対して憎しみを抱き、足に噛みつくことで暴力行為に反抗すると共に暴力を止めようとしている。自分と同じ女性である母に同情しており、女を支配する男を敵として見ているのだろう。ざん子は父を「恐れていなかった」。一方、父は「この髪の毛赤い子」が「気に食わ」ず、彼女の「目が氣になる」のだった。しかし、ざん子の逆襲の効果はなく母への暴力は続いた。

ある時、「雪がとけはじめ」「凍りあがってとけた畔は崩れ」、それに「いじけたはこべがはみついて生え」る頃に、家族みんなで田圃の方へ向かった。母は男の子を「兵児帯で背負って行った」。ざん子は「赤い髪で腐った藁の香のする泥をいじった」。父は畔で、「鎌をといで」いた母を「殴り」、「手を振上げる時には、堤や堰の所に人が働いている事も忘れてしまった」。「家の生活は、畔まで運ばれて行った」とあるように、今まで家の中で暴力を振るっていた父は人目も気にせず、外でも母を「殴る」ようになっていたのだ。「いつものとおりだまって」おり、一方的に暴力を受けている母を見て、「どうして母が泣かないのだろうか」とざん子は不思議に思った。母は「泣」くどころか、「黒い暈のある目でうすく笑」った。母は何故抵抗しないのだろうか。彼女は夫と共に農業に従事し、家事・育児も担っているにも拘わらず、男性中心社会の中で夫に支配されている。また、「殴られる」ことは日常茶飯事になっているので、暴力を仕方がないこととして受け止め、諦めている。それに「泣」いて自分の悲しさを表面に出したら、夫は一層機嫌を損ね、ますます

す襲ってくるので、「笑」いを自己防衛の手段として使っているのだろう。自分の本心を隠し、自我を押し殺しているのだ。母のそのような悲惨な様子がざん子にとつて切なかつたに相違ない。ざん子は「土の塊を拾つて」父の方へ「投げ」、反抗心を表した。父は「じつと」女の子を見て「田の草の中へ手洩を飛ばした」。「手洩を飛ばす」行為は、不機嫌を象徴するものであった。父の「顔がみちて来た怒りの為にはんやり拡が」り、彼は近づいて来て拳を振上げ、また母を「殴った」。

その後、春が去って行き、「長い梅雨がやってきた」。「家には金が少しもな」く、「売る米もなかつた」。子供達は「紙が買って貰えずに新聞紙を切つて習字帳をつくつた」。「その新聞紙さえ家にはな」く、家の経済状況が悪化し、生活がますます苦しくなつていながらも、父は「酸っぱく」て、「蛆の様に糞の浮いた」酒を「甕の蓋を藁で掩うことも面倒」になつたほど、多量に飲み続けていた。母は「田の水を見に行つて濡れてかえつて来」ると、父は「それを受け取っていた様に何かぶつぶつ言」い、「着換えようとしてぬれた着物を脱いだ所を二つつづけて殴つた」。「白い皮膚の下がぱつと赤くなつた」ほど力強いものだった。ざん子はそんな心無い父を「見ながら成長した」。思春期を迎えたざん子は男と女における支配・被支配という関係を認識せざるを得なくなり、「恐ろしくなかつた」父が「恐ろしくなつて来た」。「男は女を打つ為にうまれ、女は男に打たれる為に生まれて来るものか」と思うようになり、自分も女なので男である父に「打たれる」ことを「恐れ」たのではないか。

母は「去年生まれた男の子を背負つて公会堂へ行った」という描写からざん子にはもう一人兄弟が増えたことが分かる。その後も

「また孕った。太くなつた腰紐が食い込まなかつた。瓜棚の父の手
洩の飛んでいる所に濁つた唾を吐いた」とあるように、また妊娠し
たのだ。家の経済状況が少しも改善されないにも拘わらず、家族が
増え、暮らしは厳しくなっていくばかりであつた。そのような状況
の中、父は妊娠中の母を相変わらず「泥のついた鳶口の様な指を拳
の中に握り込んで」「殴つた」。母は「濁つた唾を吐きながら」「殴
られた」。ごん子は「頭数の多い」「家族」を支えるために働きの出
なければならなくなつた。

彼女は「製糸工場へ通つた」。「無数の不幸な娘が、細い歌に合わ
せて、柶をくるくる繰っていた。絹糸をつくり出す自分等が絹で
織つた着物をきることが出来ずに、木綿の袖口をびしょびしょに濡
らして糸をとつた」。ごん子もその「無数の不幸な娘」の一人とし
て「袖口を濡らして糸をとつた」。製糸工場に働きの出る娘たち
について村上信彦『大正期の職業婦人』⁶⁾では、「自由意識」ではなく
「親の強制意志」による場合が「非常に多い」と指摘され、「なによ
りもそれを立証するのは前借金⁶⁾の存在である。つとめるに際し、な
にがしかの一時金が入ること、その金は自分が貰うのではなく親の
所有に帰する」ので、「親が娘を特別に製糸や紡績に出したがる」
「雇傭契約が本人ぬきの親と会社との契約」であつたとされている。
ごん子も自分の意志ではなく、親の希望で工場に通つていると言え
る。ごん子の場合も、「三十円の前借」が出ていた。そのうちの「五
円だけ母の産婆の礼になり」、「二十円は借金の戻しに消え」、「残り
の五円」で「新しいランブの笠」を買つたとあるように、製糸工場
での辛い仕事を頑張っているにも拘わらず、ごん子の給与の一切は
家族のために消え、少しも自分のために使うことができなかった。

「いつそ東京へ行こうかしら」と、ごん子はこのままでは自分の意
志で生きられないことを悟っていた。いつか自分も母のように結婚
し、子供を抱え、父のような「男に打たれる」ことを「恐れて」い
た。夫婦間の暴力に曝された子供の反応について「家出する子もい
る」⁷⁾とされているが、ごん子もいよいよ家から逃げ出すことを決意
する。

ごん子は暴力が存在する家庭に生まれ育ち、子供の時から母が
「殴」り倒されるのを見る日々が切なかつた。そんな家庭に居場所
はなく、まさに生地獄であつたため、脱出をはかつたのだ。

二 幸せの崩壊

「明るい生活」の追及のために東京にやってきたごん子の目に留
まつたのは「自働電話に立てかけた板」であつた。「交換手募集、
見習期間短し、初任給二十一円、判任官登用の途あり」と書かれて
いた。一人で農村から都会へ、「無断で家を出て来た」心細いはず
のごん子にとつて、看板の「白ペンキは銀色に輝いて見えた。「蝸
牛の様に一字一字を辿って行き足許の自働電話の日かげに目を落す
と休まるのを感じた」。「初任給二十一円！判任官とは裁判所の役の
名前の筈だ」と考えた。仕事の条件は予想以上に良かった。当時の
電話交換手について「志願者の資格は小学校卒業以上、一三―二〇
歳の未婚者となつてゐるが、交換手となつたのちに結婚するのは自
由である」と記されているように、ごん子は資格や年齢からすれば、
適格基準を満たしていた。また、「志願者は簡単な試験と体格検査
に合格すれば」、「養成所に入り、約一ヵ月練習してのち住所附近の
局に配属」⁸⁾されたので、交換手の仕事に就くことは困難ではなかつ

た。しかし、ざん子は「何となく不安であった」。

次の問題は居住探しであった。「宿屋は何処だろうか」と悩みながら、「見回した」。その時、「根掘り工事の男等は水道口で鼻を鳴らして水を呑」んだ後、「赤い背中を見せて再び穴の中に飛び降りた」ことに気付いた。「コンクリートミキサーはセメントと砂利をまぜて雷の様に鳴って回」っており、「聴覚をつぶされた土工達は自分の手足をばらばらな機械に感じた」。その「土工達」の中に「背の低い」磯吉が「目立って」いた。彼は「三十を過ぎていた」。「土を投げて頭を上げた」時に、彼は「ふと穴の上で女の瞳に突当たった」。それはざん子と磯吉の出会いの瞬間であった。「土を掬って再び目を上げた」時に、彼はざん子の「両顎が耳の下に岩の様に突出しているのを見」ると、彼女は「靨くなって中央電話局への道をきいた」。彼は「ミキサーの音」で「聞こえずに聞きかえし」、「吃って」「建物を指し」、「鶏冠の様に靨くなった」。「自分の異常に短い背丈を感じ」ながらも、「礼を言って歩き出した」彼女を追いかけた。彼女のために「半日の労働を放棄した」ことを「悔いはしなかった」。二人が惹かれ合ったのは、身体的コンプレックスという共通点があったからだろう。磯吉は「異常に短い背丈」に対してコンプレックスを感じていたように、ざん子は「醜」さ、「小鼻が平で二つの目頭の遠い」ことを気にしていた。さらに、二人は直ちに「世の中のすべての結婚の習慣と手続きとを嘲って夫婦になった」。

このように、ざん子の都会での新しい生活が始まった。結婚して幸せになり、「昨日は十日も前の事の様」で、「汽車にゆられた一昨年は一ヶ月も前」のように感じられた。「一夜で膚が白くなった様に思った」。母に暴行を加えていた田舎の父親を「見ながら成長」し、

「男は女を打つために生まれて来ている」と思い込んでいた彼女は、「それは、幾重にも青い山脈にかこまれた、山の中の人間どもにしかあてはまらない理屈」だと思ふようになっていた。彼女は父とは違う男を得られたことに幸せを感じていた。「頭を掻きながら、耳かきのついたかんざしを一本買」う「ついでに」夫の「足袋を買って来よう」という「気持になった」。夫も「五月の日給をためて袴の生地を買」い、「階下の女房が近所で仕立てさせて来た」とあるように、一ヶ月の給料をかけて職場用の服を用意し、職業婦人として新しい生活を始める妻を応援した。ざん子は母親とは異なり、夫とお互いに思いやりのある夫婦関係を持つことができた。夫が買ってくれた袴を「腰に結びつけて見て、小さい手鏡の足をひら」き、「一部分ずつ体をうつつして見た」。「気がさして少し笑った」。「田舎では袴をはいた女が通れば、家の中から駈け出して見たものだ」。袴は明治時代から大正末期には女学生の制服として多く着用されていたので、女学校に行けない貧しい農村の少女達にとつて憧れの姿だったからだろう。「袴をはいて電話局へ通った」が、夫は「土工の亭主を知られては可哀そうだ」と気遣い、「電車が止まり切らぬうちに飛降りて作業場へ消えた」。

ざん子は職場で「胸掛電話機を掛ける事を習」い、「通話器具の名称を覚えた」。「接続を要求して来る信号ランプをパイロットランプ」と言うのを「覚えるために三日かかった」。「呼び出す事をオーダーすると言」うが、「田舎のオタという言葉ですぐ覚えた」とあるように、新しい仕事を一生懸命に覚える。ざん子は母とは対照的に、自立することができて充実していた。

仕事を始めてから「三ヶ月たった」が、彼女は依然として見習で

あった。募集広告に「見習期間短し」と書いてあったにも拘わらず、約束が守られなかった。本来ならば、「一カ月は見習として後見付で交換台につき」、「一人前の交換手になるのは三ヶ月目」¹⁰であった。ところが、「白い制服をきて胸掛電話機をかけ、指の腹で信号キイを向うに押し」、「赤いランプが呼んで来る」。「青いランプが終話を信号」し、「赤いランプは消えたかと思うとすぐ次を呼んでついで来た」とあるように、ぎん子の場合は「仕事は完全に一人前」になつていたものの、まだ立場は「見習い」のままであった。しかも、最初に提示された「初任給二十一円は拝命してからの事」であり、「見習期間は手当として十三円しか貰えなかった」。当時の交換手の給料に関しては東京市社会局の調査によれば、交換手の一ヶ月の平均給与は三五円一〇銭¹¹とされていることからぎん子がもらつた「十三円」の給与がいかに低かつたかが分かる。「電車賃が五円」、「下駄や足袋やクリーム代に六円」、「残りの内一円は共済会積立金」で、「あとの一円は休息時間の餉パン代にも足りなかつた」というように、都会に出て来て職業婦人として働いても生活は改善されず、以前の農村の貧しい暮らしと変わらなかつた。ぎん子は苦惱し、会社側に対して不信感を抱くと、「一人で長い間考え、夜店で仮名つきのパンフレットを買つて来た」。「それには働く者と資本家との関係が親切に書いてあつた」。「長い間の疑問」が「解け」て、「うれしかつた」。「更に今一冊買つて来た。更にわかつて来た様に思つた」とあるように、資本家と労働者の関係について学び、資本家側に搾取されており、もともとの仕事の条件が、労働者を引き寄せるための誘い文句に過ぎなかつたことを理解した。また、募集広告に「判任官登用の途あり」と書かれていたのだが、判任官になるまでの順

序について「欠員が出来るに従つて主事補にな」り、「主事補は交換手の一部を監督するもので、主事補中成績の優秀なものは書記補という判任官に採用されるが、これはごく稀である」¹²、さらに「職場はほとんど女ばかり」であつて、「男性は主事・課長・局長だけで、女はどんなに頑張つても主事以上になれなかつた」とされていようように、広告の内容は貧窮した無知な少女達を吸引するための策戦だつたと言える。

以前、小作料として米が巻き上げられたことに対して正々堂々と行動をするのではなく、「子供の尻をつね」つて、「泣」かせることで米の「競売を妨害」するだけしかできなかった母と違つて、階級問題に目覚めたぎん子は、不公平に対して声を上げ、現状の打開策として他の職員と話し合つてみることにした。彼女は「交代室をさけて便所の鏡の前に立つた」。その時、他の「勤務中の女は便所へ行く顔をして鏡の前に来」て、「鏡を覗き込んで懐から紙白粉を出した」時、ぎん子は傍へ寄つて行き、「見習期間の長い事を話しかけた」。女は鏡の中でぎん子の顔を見て「強く首肯いた」が、「申し合せて昇給願をでも出そうじゃないの」と言うのと「だまつて」しまい、「鏡に顔を近づけ唇を尖らして口紅を塗つた」。「そういう女が多かつた」。つまり、不公平に曝されていることを分かつていながらも、立ち向かおうとする「勇氣」のある者はいなかつた。ぎん子の母も反感は示したが、積極的に行動を起こさなかつた。一方、他の女性達と違つて、堂々と対抗するところにぎん子の勇敢さや新しさが浮彫りになる。ぎん子は「失望しなかつた」。仲間を募つたが、会社側の抑圧に反対の声を上げようとしたことが暴露され、「夜勤に回された」。

「夕暮、埃の町を電車に乘」り、「朝、勤務を終えて寝不足の目」で帰ってくるような、さらに辛い生活へと変わっていき、日勤の夫と「月と太陽の様に食いちが」うことになっていった。夫は「夜勤く工場場を探しに行った」が、「下駄の鼻緒を切り藁口を落して」帰って来ただけで、仕事を見つけれなかった。家に帰って来て花火に出かけるために「団扇を探し」、いらいらしてぎん子に「団扇のありか」を聞いたが、「出勤時刻におくれた」彼女が「二三言三言答える」と、「いきなり」「殴った」。母とは対照的に、ぎん子は夫に対して口答えをした。「男に打たれ」たのは堪らず、「むかって行こうとした」が、「いつもだままって」耐えていた母を「思い出し」、「ふとやめた」。「夜勤」のせいで夫との関係が悪くなったと言える。

ぎん子は母のように暗い生活を送るのではなく、「明るい生活」を求めようとし、農村から都会へ飛び出して職業婦人の道を選んだ。都会で父のような乱暴な男ではなく、「男は女を打つために生まれる」という思い込みを変えてくれる思いやりのある男に巡り会い、仕事も得て幸せて充実した生活を手に入れたかに思われた。しかし、結局は職場で酷使され、暴力によって夫に支配される身となってしまうた。

三 二重の苦しみ

ぎん子は七ヶ月経っても「やはり見習」のまま「夜勤」を続け、夫と「顔を合わせるにはどちらかが休まねばならなかった」。給与も変わらず、「十三田のうちから休んだ日数だけの金額が少なかった」。ぎん子は隠れて資本家と労働者の関係について勉強を続け、「幾度かよんで手垢のついたパンフレットを人にすすめ」て、支配

者に立ち向かうべく計画を練った。パンフレットを「一と晩で読んで来る様な人間は大抵話がわか」り、「長い見習期間に不平を持ち、仲間を誘う事に同意した」。だが、「便所の鏡の前に長く立っている様な女には望がなかった」。パンフレットをすすめると、「ええありがと」と言って「洗面流しの縁に置いて刷毛を使」い、「戻りには白粉だけを帯にはさんで、それを置忘れて行った」。資本家に逆らうということは、解雇されることを意味していたので、「勇気」を持って共闘しようとする者は一人もいなかった。「置忘れていた」パンフレットは「主事補の手を経て苦い感情」でぎん子に戻り、働く者の組織を企てようとしたということで「ある日に突然解雇された」。しかも、理由は「私儀家庭の都合により」とされ、不当に辞めさせられたのだ。「戸棚を片付けていると主事補が何気なく寄つて来」て、「電話局では解雇される者は今まで盜癖者としまつていた」と言つたところに表れているように、今まで反抗する人は一人もいなかったのである。

家に帰ってみると、「茶碗に溢れた酒は畳に流れ」ており、夫は「小さい赤い目を、女の顔に据えておけない程酔っていた」。「晩に帰って来ない女房はいらないと舌を巻いて言った」ように、夫婦の時間が取れないことにいらだっていた。本来であれば、自分の辛い気持ちと夫と分かち合つて、慰めてもらいたところだったのだが、酒に乱れている様子を見てぎん子は「袴のまま立って解雇されて来た事が言えなかった」。夫の「小さい体が拳を振上げて狼の様に向つて来た」時に、ぎん子は父を「思出していた」。いつも暴飲してむやみに母を襲っていた父の憎むべき姿が思い浮かび、「胸に渦が巻いて来て」夫の「膝の脇の畳に佃煮を投げ」、「目をつぶって殴りか

かった」。ぎん子は母とは対照的に夫の暴力に「殴り」返すことで抗議した。夫と一緒に時間を過ごせないことはぎん子にとっても辛かったはずだ。しかし、夫はぎん子の気持ちを理解せず、暴行を働いた。

暴力を振るう夫であっても、彼女は最後の給料としてもらった「二三円」で「朝顔の鉢」と夫の「着物を買った」。なぜぎん子は他の花ではなく、わざわざ「朝顔」を選んだのだろうか。「朝顔」は短い寿命のため、「はかない恋」、「報われない愛」の象徴ともされている。わずかなお金で、夫のために着物を買う行為には夫への愛情が表れており、「朝顔」の花からはぎん子の報われない愛が読み取れるのではないか。

ぎん子の失業後、家計の負担が全て夫の肩にかかってきた。「残暑の空の下の労働で脂肪を出し切った」後、家に帰った夫は「腰にかけて掌で膝を撫でて頬に酒を呑みたがった」。「一日休むと一日食えない」状況になっていた。ぎん子は「北と南を指したがる磁石を思い出さずには居られ」ず、田舎にいた時の苦しい暮らしに戻ったように感じた。ある日、夫は「黴の生えた一升罌を押し入れから出して蠅が落ちていたので気を悪く」し、ぎん子が朝飯の用意をしていた間に出かけて行き、「酔って」帰ってきた。「飯前の朝酒が腸にこたえて、材木の様な音を立てて寝転」っていた時、ぎん子は「三言三言言った」。暮らしがきつくなっている中、夫が酒を飲むことに愚痴をこぼしたに相違ない。すると夫は「大きい声を出してねたまま財布を投げ」た後、「いきなり殴りかかって来た」。「打下した手を振り上げ下した」。ぎん子は夫の「人さし指」が父のように「二節足りない所から切れて」おり、「鳶口の様にくった爪」が出て

いるように思った。「そして自分の体は、しなやかな母の体の様」で、「腰紐が腰に食い込んで」「痛い」ように思った。夫に父の姿を、自分に母の姿を見ていたのだ。ぎん子もやはり、母と同じく毎日のように夫に「殴られる」ようになっていた。

そもそも父がいつも不機嫌で、酒に溺れては母に暴威を振るい続けていたのは、高い小作料をとられながら苦しい農作業に携わっていたからだ。ある年、「八月に入っても雨がふった。(略) 稲の穂はあぶなげな白い粉を吹いた。それが花であった。しかし、一番かわいた風が必要な時にじとじと雨が降った。九月に入っても雨が降った。(略) 草はかんざしの足の様にただすうすう伸びた。そして先のとこらにぼつと瘦せた穂を出した」と、気候不順のために稲の大きが悪くなった。その時、高い小作料が払えないため、「小作料低減の下検分をして貰う」ことになった。「消防小頭をやっている男と顔ききの老人」が「酒造問屋の地主」の方に行くことになったが、「用向ははたされ」ず、二人は「少しの酒でうまく買収されて帰って来た」ので、小作料を削減してもらえなかった。結局、地主の方が「にこにこ目尻で笑って小作料の米をはかりにかけた」。「目方の足りない俵は上り框に立って席の方へ事もなげにほうり投げた」。「米は小作料にも足りなかった」のだ。「地主と小作人の関係」は「博多の帯」にある「二つ」の「並行して行く縞」に喩えられ、「小作人」は「黒い糸で織られた縞」、「地主」は「明るい糸に織り込まれた人間」とされているように、父は地主に抑圧されており、追い詰められた状況にいた。しかし、地主という強者に対して、反抗することができないため、不公平に対する欲求不満を暴飲の力にまかせ、自分よりもさらに弱者である妻を「殴る」ことによって解消しようと

していたと言える。

ぎん子の夫の暴力の背景にも父の場合と同様の図式があったことが末尾の場面で明らかになる。ある日ぎん子は、夫を探して工場まで出かけていった。「工事場の足場の下には裸の男達が集まっていた」。近寄って行くと「男等の輪の真中に詰襟の現場監督」が「髭の顔を動かしどなって」おり、「頭を垂れてどなられているのは夫であった」。監督は「腹の底から押出す声でどなり、「吋尺で夫の横顔を殴った」。父と同じく労働者として弱者の地位にあるぎん子の夫も資本家の手先である監督に虐げられていた。職場での欲求不満から暴飲し、女性としてさらに弱者である妻を「殴」っていたのだ。監督は更に「見下して吋尺を持たない方の掌で横に殴った」。頭を「殴られた」夫は「もうよろけて傍の男に突当り体を安定させた」。「人間の卑屈な姿であった」とあるように、夫は監督の暴力に反発することなく、屈従的である。その姿を目撃したぎん子は「いきなり人を分けはいつて、監督に一と声浴びせかけ」、「卑屈な夫の代わりに監督の胸はたんの所に自分でもわからない怒声を吐きかけた」。いつもの立ち向かっていくぎん子の姿であった。しかし、この末尾の場面におけるぎん子の行動は、正義のためのみならず、夫への愛情ゆえでもあった。しかし、それを見た夫の反応はどうだろうか。

瞬間であった。

監督の方へ向いて卑屈に固まっていた夫の顔が、女の方へ向いて赤ダリアの様にパツと広がった。夫は何かどなった。夫は拳を振りあげて女の上に振下ろした。

それは見慣れた拳であった。それが力いっぱい振り下された。女はセメントの濡れている地面に投げつけられた。声をあげて泣いた。割れる様に泣き出した。鉄骨を打ち込む音が頭の上の空にひびいた、呆れて立っている監督の前で夫は妻を殴った。

夫は監督に怒声を浴びたぎん子に対し、怒りを覚えた。資本家に逆らった結果、妻の仕事がなくなり、夫婦は既にぎりぎりの生活をしていた。一人で家計を支えざるを得なかった夫にとって失業への恐怖感が何よりも強かったため、自分への愛情から自分を助けようとしている妻の気持ちは理解できなかった。働き口を失うことができず、追い詰められた状況にいた夫は妻を「殴った」。「力いっぱい振り下され」、「投げつけられた」ぎん子は「割れる様に泣き出した」。

性支配と階級支配という二重の支配に曝された被害者の涙であった。都会は農村と何も変わらず、都会でも労働者は資本家の支配下で、「怯えて」生きており、「勇敢な労働争議」がなかった。また、自分の思い込みを変えてくれるように見えた都会の男もやはり「殴った」。この泣き声はかつて「支配される階級のなかの支配関係」という「二重の抑圧」に対する「抗議の手段」¹⁵⁾と捉えられていたが、それだけではないだろう。確かにぎん子は幼少時には父に、大人になつてから夫に、そして会社に対抗してきた。しかし、闘う中で表には出せない様々な感情を抱いていたはずだ。それが涙として一気に溢れ出した。ぎん子の涙には「殴られる」母を目にする時に感じた切なさ、職場で酷使され解雇されたことに対する憤り、最後に至つても遂に夫に自分の気持ちを分かってもらえなかったことに対

する絶望など様々な感情が含まれていた。同じく二重の支配による苦しみを強いられていた母や他の女性の職場仲間には泣かない。それは他の女性達がただ「だまって」いたからである。ぎん子は強く闘い続けてきたからこそその挫折感、悲しさ、苦しさによって「割れるように泣く」のであった。

おわりに

本稿では、母と対比することによってぎん子の新しさを明らかにした。ぎん子の母は農婦で、夫と共に働いてはいるが、夫に散々「殴られ」ても口答えすることはなかった。母のそのような惨めな様子を見て育ったぎん子は農村から都会へ逃避し、職業婦人の道を選んだ。母のようになるまいとする強い意志によってぎん子は都会で仕事をすることができ、父とは違う思いやりのある男に出会い、つかの間の幸せな生活を送ることができた。その後、会社で虐げられ、夫との関係も悪くなっていくが、職場では働く者の権利のために一所懸命に闘おうとし、男の支配に対しても母のように「だまって」いるのではなく、「殴り」かかり、強く反感を示した。母と同じく夫に暴力を振るわれても、それに向き合うぎん子の姿勢には決定的な違いが見られる。

ぎん子の社会の不公平を改善しようとする思いに変化をもたらしたのは結末の場面であった。ぎん子は現場監督に「殴られ」ている夫を助けようとし、監督に「怒声を吐きかけた」瞬間、逆に夫に「殴られた」。それまで強く闘ってきたぎん子であったが、遂に「割れる様に泣き出した」。ぎん子の涙には、先に指摘したような切なさ、憤り、絶望など様々な感情が織り込まれていた。闘い続けてきたか

らこそぎん子は他の女性に比べて、一層の苦しみを抱えていたと言える。

以上見てきたような、ぎん子と母の結婚生活の形象化から、当時の資本主義社会の底辺の女性が階級と性による二重の支配を受けるということは、社会的にはむろん、私的にも人間らしい生活のことごとくを奪われることを、本テクストは訴えている。たい子文学は従来、一貫して強い女主人公が描かれていると見なされてきたが、末尾に噴出したぎん子の涙には、強さの裏に隠された様々な感情が込められていることを、本稿では明らかにした。

註

- (1) 『文芸戦線』(一九二八・一一)
- (2) 『文芸時評』(『文芸春秋』一九二八・一一)
- (3) 『女と言説』(有精堂編集部編『講座昭和文学史』第一巻 一九八八・一一)
- (4) 「笑う女、女の号泣―平林たい子初期作品」(岩淵宏子他編『フェミニズム批評への招待―近代女性文学を読む』学藝書林 一九九五・五)
- (5) 倉本英彦「夫婦間の暴力は子どもに何をもたらすか」(『児童心理』一九九八・六)
- (6) ドメス出版 一九八三・一一
- (7) (5)に同じ。
- (8) (6)の村上信彦「大正期の職業婦人」に同じ。
- (9) 西清子著「職業婦人の五十年」(日本評論新社 一九五五・一一)において、当時の電話交換手について「ほとんどが小学校卒業の学歴しかもっていなかった」、「交換手の特別な風俗であった格姿も、どれほど彼女たちの心をときめかしたであろう」という記述があることから、女学生の制服であった格姿への憧れが窺われる。

- (10) (6)に同じ。
 (11) (6)に同じ。
 (12) (6)に同じ。
 (13) (9)に同じ。
 (14) 伊宮伶編著『花と花言葉事典』(新典社 二〇〇三・一〇)
 (15) (4)に同じ。

〔付記〕本文引用は、『平林たい子全集』第一卷(潮出版 一九七九・四)に拠る。

受贈雑誌(五)

実践国文学	実践国文学会
斯道文庫論集	慶應義塾大学附属研究所斯道文庫
十文字国文	十文字学園女子短期大学国語国文学会
上越教育大学国語研究	上越教育大学国語教育学会
上智大学国文学科紀要	上智大学文学部国文学科
上智大学国文学論集	上智大学国文学会
湘南文学	東海大学日本文学会
昭和女子大学大学院日本文学紀要	昭和女子大学
女子大国文	京都女子大学国文学会
叙説	奈良女子大学国語国文学会
資料と研究	山梨県立文学館
人文	鹿児島県立短期大学
人文学報	都立大学人文学部国文学研究室
成蹊国文	成蹊大学文学部日本文学科学研究室
成城国文学	成城大学成城国文学会
成城国文学論集	成城大学大学院文学研究科
清心語文	ノートルダム清心女子大学日本語日本文学会